

2020 年度

国 語

最初に、以下の注意事項をよく読んでください。

1. 問題冊子は監督者の指示があるまでは開いてはいけません。
2. 監督者の指示にしたがって、解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。問題冊子は受験番号のみを記入してください。
3. 試験問題の内容に関する質問には答えられません。それ以外の用事があるときは手をあげてください。
4. 受験中気分が悪くなったときは、監督者に申し出てください。
5. 問題冊子および解答用紙は持ち帰らないでください。
6. 漢字で書くべきところは漢字で書いてください。

受 験 番 号	
------------------	--

* 解答用紙に字数制限がある場合は、句読点なども字数として数えます。

【一】 次のそれぞれの問いに答えなさい。

問一 ①～⑥の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① ショクミンチ支配をやめる。 ② 保険がマンキになる。
- ④ 駅からのリヤクズを書く。 ⑤ ピアノをチヨウリツする。
- ③ 人の命をアズかる仕事。
- ⑥ やわらかなキヌオリモノ。

問二 次の漢字の部首を書き、その部首名をひらがなで答えなさい。

犯

問三 次のの中から意味が似ていることばを二つ選び、記号で答えなさい。

ア、消化 イ、消息 ウ、音信 エ、信用 オ、音楽

問四 次の□に同じ漢字を入れて、四字熟語を完成させなさい。

□材□所

問五 次の□に生き物の名前をひらがなで入れて文を完成させなさい。

□の歩みだが、あきらめずに最後まで取り組もう。

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

放課後、指定された時間に図書室に行くと、どこにも佐藤先輩の姿はなかった。

待つてみるけれど、三時四十五分になっても、四時になっても現れない。

「あの、督そ……、佐藤先輩どこにいるか知りませんか？」

カウンターでパソコンに向かっていた司書の七海さんにきいてみた。

「さあ……今日は見てないね。明日の昼休みは図書委員の当番で来るけど。三年A組の教室のぞいてみたら？」

ああ分かりました、と答えたものの、ちょっと X。上の学年のクラスをのぞくのとてすごく勇気がある。

図書室から出て、教室の扉にはまっている窓から佐藤先輩の姿を捜した。

いない。数人が窓際に集まって何かしゃべっているだけだった。

残念、かも。

わたしはいつの間にか吟行を楽しみにしていたみたいだ。

翌日の昼休み、佐藤先輩は図書室の書架の整頓せいとんをしていた。

「昨日、吟行するんじゃないかなかったですか？」

わたし、待つてたんですけど、ということアピールするように、わたしは少し Y。

「もう行かないよ。」

「え？」

「花岡さんと吟行はしない。」

佐藤先輩はわたしを①のほうを見ず、本の背ラベルに目を向けたまま言った。

「わたしといるところを見られるの、嫌いやなんでしょ？」

ああ。

昨日の給食の時間、自分の口から飛び出た言葉を思い出す。

『無理やり連れていかれるだけなんだよ。ほんとには迷惑！』

あの言葉が聞こえていたなんて……。

わたし、サイテーだ。

「ごめんなさい。あの……。」

ちがうんです、と言おうとしたけれど、言えなかった。

何も、ちがわないじゃないか。

下級生からも変わり者あつか抜あつかいされている佐藤先輩と、仲よくしていることを周りに知られるのが嫌だった。

わたしまで変わり者のカテゴリー注3に入ってしまうと思ったから。

なのに、二人にいるときは仲よくしたいなんて、

佐藤先輩の気持ちなんて考えていなかった。

「わたし、周りから自分がどう呼ばれているかなんて知ってるよ。いばって督促状とくそくじょうを持つてくるから、督促女王。どの教室も、わ

たしが入っていくと嫌いやそうな顔をする。」

「わたしは……。」

「いいよ、自分の身を守りなよ。わたしとちがって、中学生活まだまだ続くんだから。居心地ねどこいい寢床ねどこは必要だよ。」

佐藤先輩はくちびるだけで微笑ほほえんでいた。怖いこわと思った。だってそれは、本当の笑顔じゃないと分かったから。

昼休みだけじゃない、何か③もっと大事なものの終わりのような予鈴よれいが鳴る。

「それじゃあ。」

佐藤先輩はわたしの横をすり抜けた。

「じゃあ七海さん、戻りますね。」

「お疲れさま。今日はもう一人の当番の服部さん来なかったわねえ。」

「来週はサボらないように言っておきます。」

佐藤先輩と七海さんのやり取りが耳に届く。

わたしも教室に戻らなくちゃ。でも、動けない。

そのとき、本棚に並んでいる一冊が目留まった。

何だか懐かしさが胸に広がって、それがマレーシアの日本人学校の図書室で読んだ小説だと少し遅れて気がついた。

その本を見つめていると、

「あら、花岡さん。もう本鈴鳴るよ。教室戻って……ていうか、どうしたの？」

七海さんに声をかけられた。

「あ、えと、その。これ借りたくて。」

わたしは **1** ごまかし、人さし指をかけて本棚からその本を抜き出した。

この本を胸に抱えて目を閉じたら、マレーシアの日本人学校の図書室にワープできればいいのに。

そんなファンタジーの世界のようなことを考えたら、涙が出てきた。

「この本、マレーシアで通った学校の図書室にもあったんです。わたし……マレーシアに帰りたい。」

わたしは日本に帰ってきてから、周りの目ばかりを気にしている。

どうして。どうして。

わたしは悔しかった。

飛行機で運ばれる間に、自分の性格が変わってしまったような気がする。

マレーシアはいろんな民族が **2** 暮らしている多民族国家だ。

わたしは、マレーシアには東南アジア系の顔の人たちだけが住んでいると思っていた。でも、そうじゃなかった。

電車に乗っても、一つの車両にいろんな人たちがいた。

トゥドウンと呼ばれる注4ベールを被ったイスラム教徒の女性たち。そのトゥドウンはカラフルで、数人で身を寄せている後ろ姿は、きれいな羽の鳥たちみたいに見えた。

その前でおしゃべりしているのは、わたしたちとよく似た中華系の人たち。(でも、髪型や服のセンスとか、どこか日本人とちがう。)

ドアに寄りかかっているのは、目のぱっちりしたインド系のお兄さんたち。

マレーシア語も、英語も、どこの国か分からない言葉も混ぜこぜで聞こえてきた。

そんな車内から、窓の外の景色以上に目が離せなかった。

タブンカ、なんていう言葉はまだよく知らなかった。でも、一つハッキリ言えることは、わたしの気分がかなり上がったということ。

すごい、すごい、すごい。

暮らし始めると何を見ても新鮮で、サイダーの泡みあわみたいな刺激しげきがあった。

扉を完全に閉じる前に走りだしちゃうバス。

舗道ほどうがボッコボコのアスファルト。

屋台で売られているカエル肉の料理。

鼻にパンチを食らわすドリアンが山積みになった出店でみせ。

バツサバツサと葉あが生おい茂しげるヤシの木たち。

大自然と都会とよが隣り合わせにあつて、街の中心にはペトロナスツインタワーと呼ばれるトウモロコシみたいな形のビルがそびえ立つ。

蜘蛛くもの巣くもみたいな大きなヒビを窓ガラスに入れたまま走っている電車もあったつけ。

解放感、というのかな。

ここに来ることができてすごくラッキーだと思った。

みんなと同じものを持たなくちゃ、同じようなタイムで走らなきゃ、同じものをおいしいと思わなきゃ。

マレーシアに来る前のわたしはそんな思いにとらわれていた。それは四年生の後半あたりからわたしの胸に蜘蛛の巣のように張りついていて。

でもここは、人とちがっていても仲間外れにされちゃうような場所じゃない。マレーシアで、わたしたち兄妹きょうだいが入った日本人学校もそうだった。

インターナショナルスクールってガラじゃないよね、とか言ってお父さんとお母さんが決めた学校だったけれど、学年の隔へだてはなくて自由だった。一つ二つの歳としの差なんて気にせず、よく一緒いっしょに遊んでいた。

⑤なのに、今のわたしときたら。

人とちがうことを怖がって、人とちがうことを否定して。

こんな自分、嫌だ。

⑥「花岡さん。」

とん、とん。七海さんは横からわたしの背中を優しくたたき、

「その本、私も好きだよ。」

ほんわかした口調で言った。

「私が中学生のころに発行された本なの。主人公の女の子に、自分を重ねて読んでた。」

わたしは 3 七海さんの顔を見る。

大人の年齢ねんれいってよく分からないけど、七海さんはまだお姉さんって呼べるくらいには若い。白い肌はだには少しソバカスがあつて、赤いフレームの眼鏡の奥おくの目がどんぐりみたいに丸くて茶色い。

それでも、この人が中学生のころって、きっと十年以上前の話だ。

「私は、昔から本が好きだったから、休みの日は一日中、自転車に乗って図書館めいぐ巡りをしてたの。たいていの図書館にその本は

置いてあった。それがすごく心のよりどころになった。嫌なことや悲しいことがあって自分の心がグラグラになっても、その本は私が行く先々で、どこでも同じ凛とした姿で図書館にある。それを見ると、安心して、私も自分の気持ちを立て直すことができたの。」

マレーシアの日本人学校の図書館にも、この中学校の図書室にも。遠く離れた場所でも、この本は変わらない……。そういえば、マレーシアの日本人学校に編入したばかりのころ、日本でよく読んでいた本が図書室にそろっていて、何だかほっとしたつけ。

今はその逆だなんて笑ってしまう。

「佐藤さんね、編入してきたあなたのことを気にしてたよ。佐藤さんも転校生だったから、花岡さんの心配や緊張を和らげようとして、それで吟行に誘ったんじゃないかな。ただ、不器用だから、あんな命令口調になってたけど、花岡さんと仲よくなりたかったんだと思うよ。」

わたしと仲よくなろうと……？

もし、それが本当だったら。⑦単に出席番号が三十一だからだけじゃないとしたら……。

わたしはひどいことを言ってしまった。

(こまつあやこ『リマ・トゥジュ・リマ・トゥジュ』〈講談社〉より)

注1・吟行……詩歌や俳句をつくるために、景色のよい所や名所などに出かけて行くこと。この作品の中では短歌をつくるために校外に出かけること。

注2・書架……本を並べて置く棚。本棚。

注3・カテグリー……部類。仲間。

注4・ベール……女性の顔や頭をおおう薄い布。

問一

1

3

ものは使えない。

に入ることはとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ

ア、しぶしぶ

イ、ごੱちゃに

ウ、わざわざ

エ、まじまじと

オ、とっさに

問二

X

Z

に入る語句として適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

X

ア、気が引けた

イ、気が重かった

ウ、気がまぎれた

エ、気が向かなかった

Y

ア、口をまげた

イ、口をふさいだ

ウ、口をたたいた

エ、口をとがらせた

Z

ア、虫がいい

イ、虫が好かない

ウ、虫がおさまる

エ、虫の居所が悪い

問三 〰〰線部「サイダーの泡みたいな刺激があった」とあるが、この表現と同じ比喩^{ひゆ}表現が用いられている文を次の中から一つ

選び、記号で答えなさい。

- ア、太陽はあふれんばかりの笑顔を見せた。
- イ、店はこれ以上ないほどにぎわっていた。
- ウ、彼女^{かのじよ}は蚊の鳴くような声でつぶやいた。
- エ、あの客船はまるで海に浮かぶホテルだ。

問四

——線部①「わたしのほうを見ず、本の背ラベルに目を向けたまま言った」とあるが、このときの佐藤先輩のようすとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、花岡さんと吟行しようと約束したが自分から一方的に破ってしまい、気まずさを感じている。
- 2、花岡さんが本当は吟行を楽しみにしていなかったと気づき、自分勝手な言動^{ごうかい}を後悔している。
- 3、花岡さんも自分のことを変わり者扱いしていたことが分かり、顔も見たくないと思っている。
- 4、花岡さんが自分といるのを迷惑だと思っていることを知り、彼女と距離^{きょり}を置こうとしている。

問五

——線部②「居心地いい寢床は必要だよ」とあるが、このように言ったときの佐藤先輩の気持ちとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、気をつかわないですむ友だちを大勢作って、これからは楽しく中学生生活を送ってほしい。
- 2、本人の気持ちをよく確かめず、気乗りのしない吟行に無理に誘ってしまい申しわけない。
- 3、自分と仲良くすることを気にしているようなので、今後は自分と付き合えない方がいい。
- 4、人の気持ちを踏みにじっておきながら、きちんと謝ることもできない人は信用できない。

問六

——線部③「もっと大事なものの終わりのような予鈴が鳴る」とあるが、どのようなことをたとえているか。その説明として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、軽はずみな発言がきっかけとなって、わたしと先輩の二人の関係が失われていくのではないかということ。
- 2、周囲の目を気にしたばかりに、先輩だけでなく同級生からの信用も失ってしまうのではないかということ。
- 3、悪意はなかったものの先輩をひどく傷つけてしまい、二度と吟行には誘ってもらえないだろうということ。
- 4、先輩との関係が同級生にも広く知れ渡ること、いずれ自分も変わり者扱いされていくだろうということ。

問七

——線部④「わたし……マレーシアに帰りたい」とあるが、わたしがこのように思った理由を文中のことばを用いて四十字以内で答えなさい。

問八

——線部⑤「なのに、今のわたしときたら」とあるが、「今のわたし」がいる環境はどのようなものだといえるか。その説明として適切なものを、次の中からすべて選び、番号で答えなさい。

- 1、さまざまな意見が尊重されて、誰からも否定されない環境。
- 2、毎日が平凡へいぼんに過ぎていき、何を見ても新鮮に感じない環境。
- 3、学年の隔てなどがなく、すぐに誰とも仲良くなれる環境。
- 4、周りの目を気にして、のびのび過ごすことができない環境。
- 5、人とちがうことをしていると、良好な関係が築けない環境。
- 6、上下の関係を重んじるあまり、先輩には意見できない環境。

問九

——線部⑥「花岡さん」とあるが、このように声をかけたときの七海さんのようすとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、花岡さんの様子がいつもと違うことに気づき、手にしていた本を話題にすることで、彼女の気持ちを落ち着かせようとしている。

2、本鈴が鳴るのに教室に戻らない花岡さんに声をかけたたん、彼女が泣き出してしまったため、理由が分からずにあわてている。

3、佐藤さんの後輩を思う気持ちを花岡さんにそれとなく伝え、軽々しく先輩の悪口を言っていた花岡さんを注意しようとしている。

4、急に泣きだしてしまった花岡さんからくわしい事情を聞き出して、解決するにはどうしたらよいか、一緒に考えようとしている。

問十

——線部⑦「単に出席番号が三十一だからだけじゃないとしたら」という表現から、佐藤先輩がわたしを吟行に誘った理由の一つとして、わたしの出席番号が「三十一」番だったということが分かる。佐藤先輩が「三十一」番のわたしを誘った理由を考えて、二十字以内で答えなさい。

【三】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

A 食物連鎖の底辺の存在

食う食われるの関係は、食物連鎖のピラミッドで表される。植物は、ピラミッドの底辺の存在である。草食動物は、植物の上の存在である。そして草食動物を食べる肉食動物はその上になる。そして、その動物を食べる動物がその上というように、ピラミッドは積みあがっていく。

1、よく見るとピラミッドが上に行くほど、^①三角形が狭まっていくのがわかるだろう。生存できる生き物の数は、エサの量によって決まる。底辺にある植物の量が多ければ多いほど、草食動物の生息数は増える。そして草食動物が増えれば、それを食べる肉食動物も増えることができるのである。逆に植物が減ってしまうえば、草食動物も減り、肉食動物も減ってしまう。強いと言われるピラミッドの上位にいる生き物は、実はピラミッドの下にある生き物に依存^{いぞん}しているのである。

植物は動物がいなくても生きていくことができる。しかし、すべての動物は植物がいないと生きていけない。ピラミッドの上に行けば行くほど、その生存基盤^{きばん}は危うくなってくるのである。

どんなに強い動物も、食わなければ生きられない。強いと言われるトラやワシは、^②どうだろうか。食物連鎖の上にいる強い生き物の方が、絶滅^{ぜつめつ}の恐れ^{おそ}があるくらい減ってしまっている。もしかすると、ピラミッドの底辺にいる植物が、一番、強いかもしれないのである。

B 食べられないための工夫

そうは言っても、植物は食べられる存在である。

ピラミッドを支える植物の方が強いのだ、と強がって見ても、食う食われるの関係では、植物は食われる一方である。植物は、どのようにして草食動物から身を守れば良いのだろうか。

その、対抗手段の一つが、毒を持つことである。前章で紹介したように、被子植物がさまざまな毒成分を持ったことは、恐竜を衰退に追いやっていった理由の一つであるとされている。

2、哺乳類は、植物が発達させた毒成分に対する能力を身につけた。まずは、毒成分を食べて死んでしまわないように、いち早く毒を認識する必要がある。

それが味覚である。

私たち人間も哺乳類である。私たちは、植物が持つ毒成分を口に入れると、舌が感知して、辛味や苦味を感じる。そして、毒を飲み込むことなく、吐き出すことができるのである。

味覚は、けっして美味しい食べ物を味わうために発達したものではない。

- 1 他の動物たちが、どのような味覚を持っているかはわからないが、同じように体に良いものは美味しく、危険なものは心地の悪い感じがあるのだろう。
- 2 こうして、食べ物の危険度をいち早く判別するために味覚があるのである。
- 3 体にとって安全で栄養価が高いものは、甘味や旨味があり、体に危険なものは苦味や辛味がある。
- 4 また、腐ったものは酸味がある。

もつとも、動物が味覚を獲得することは、植物にとっても都合の良いことであった。

せっかく毒で身を守ろうとしているのに、体の大きい動物が毒に気が付くことなく死ぬまで食べ続けたとしたら、どうだろう。天敵である哺乳類は最後には命を落としてしまうとしても、それまでには、かなりの量の葉を食べられてしまうことだろう。これでは、被害が大きい。

植物にしてみても、動物を殺してしまいたいわけではない。それよりも、ひと口、口に入れた時点で食べられないと判断して、食べるのをやめてくれた方が、植物にとっては都合が良いのである。

もしかすると、動物が苦味として毒を認識する [a] を進化させる一方で、植物の方も認知されやすい物質を持つように進化していったのかも知れない。

C 毒に対する草食動物の進化

植物の毒成分を認識することは大切だが、すべての植物が毒成分を持ち始めると、それではエサがなくなってしまう。そのため、植物の毒成分に対して、動物の次の手段は、毒を無毒化して、植物を食べることである。

イヌやネコは、チョコレートを大量に食べると中毒を起こして死ぬとされている。これは、カカオが持つテオブロミンというアルカロイドがイヌやネコにとっては毒成分なのである。イヌやネコは、このテオブロミンに対する対抗手段を持っていないのである。

3、人間にとってはチョコレートが毒などとは、とても信じられない。美味しいお菓子である。テオブロミンは有毒な物質だが、人間はこれを代謝して無毒化させることができるのである。

人間もテオブロミンは、毒成分を表す苦味として

b

するが、人間は程よい苦味として、おいしく感じる。

人間が野菜として食べているタマネギやネギも、イヌやネコには有毒な植物である。タマネギやネギが持つアリルプロピルジスルファイドが、動物に対する毒成分なのである。もちろん、人間はこの毒成分に対する対抗手段を持っているので、タマネギやネギを食べても、まったく問題はない。

4、イヌやネコは違う。もともと肉食動物であるため、野生では植物を食べることはない。そのため、植物の毒に対する感覚や防御システムが発達せず、まったくの無防備なのである。

イヌやネコにとって有毒なチョコレートやタマネギを人間がおいしく食べられるということは、人間がそれだけ植物に対する防御を進化させてきた証拠でもある。

D 草食動物の進化

植物を専門に食べる草食動物は、人間よりもっと発達している。

たとえばウサギは、麻酔ますいの前投与ぜんとうよ薬であるアトロピンと言う薬が効かないという。アトロピンは、ナス科の植物が持つアルカロイドである。草食動物であるウサギは、植物に対する防御手段を発達させた結果、このアルカロイドさえも分解する酵素こうそを持つているのである。エサが豊富な環境かんきょうであれば、毒草を食べる必要はないが、ウサギのような小さな草食動物は、エサが限られた場所では毒草であっても食べないわけにはいかない。そのため、ウサギはアルカロイドを分解できるように進化を遂げているのである。さらに、ウサギにとっては、毒草を食べることで、大型の草食動物とエサを巡めぐって争わなくても良いという

c もあるだろう。

また、オーストラリアに棲すむコアラは、ユーカリの葉だけを食べる。しかし、ユーカリは有毒植物である。コアラはユーカリしか食べないということは、毒草のみをエサにしているということなのだ。コアラはニメートルにもなる哺乳類最長の盲腸もうちょうを持つていて、盲腸内の細菌さいきんがユーカリの毒を解毒げどくしているのである。

⑤ 草食動物も、植物が持つ毒に対して無策むさくだったわけではないのだ。

E 苦味がうまいという奇妙な動物

植物は、さまざまな物質で身を守り、動物は苦味や辛味として、その物質を認識し、食べるのを避さける。これが、植物と動物とが作りだしたルールである。

ところが、^Aあろうことか、毒成分である苦味や辛味の成分をおいしいととらえる動物まで現れた。それが我々人間である。

たとえば、私たちが口にするピーマンやニガウリは未熟な果実である。未熟なうちに食べられないように、葉に隠かくれるように色を緑にし、苦味物質を持つているのである。ピーマンも熟せば赤く色づくし、ニガウリも黄色くなる。そして、鳥に種子を運んでもらおうとするのである。

ところが、人間という動物は、苦い方が美味うまいいと言って、未熟なピーマンやニガウリの方を食べているのだから、植物にとつ

ては、迷惑な話である。^⑥

ピーマンやニガウリが嫌いな子どもたちは多い。

子どもたちは甘いものが大好きである。砂糖や甘味料があふれた現代では、甘いものは体に悪い印象もあるが、本来、甘味は熟した果実の味である。自然界に甘いもので体に悪いものはない。だからこそ、子どもたちは甘いものを好み、苦味を嫌うのである。子どもたちの味覚は、動物としては、じつに正常なのだ。

X

本当は、子どもたちとピーマンの利害は一致しているのである。

F

植物が毒を作るといふ戦略は、極めて有効な手段である。

それでは、どうして、すべての植物が毒をもった有毒植物にならないのだろうか。

植物は、病原菌や害虫から身を守るための物質も持っている。これらの物質の多くは、炭水化物から作られる。炭水化物は植物が光合成をすれば作りだすことができるので、成長しながら光合成をして稼いでいけば、いくらでも作りだすことができる。

5

、動物に対する対抗手段として効果的な毒成分は、アルカロイドである。このアルカロイドは窒素化合物を原料とする。窒素は、植物が根から吸収するものであり、限りある資源である。窒素は、植物の体を構成するタンパク質の原料であり、成長に不可欠なものである。そのため、植物がアルカロイドなどの毒成分を生産しようとすれば、成長する分の窒素を削減しなければならぬのだ。

植物にとって、動物に食べられないことは大切なことだが、それだけにエネルギーを注ぐわけにはいかない。

Y

は、

植物にとつてもっとも大切なことなのだ。

植物は種類もたくさんあるから、エサとなる植物が生い茂っているような場所では、動物に食べられることは、そんなに頻繁にあるわけではない。苦労して少しばかりの葉を守るよりも、他の植物に負けないように生い茂り、枝や葉をそれだけ増やした

方が良いのである。

(稲垣栄洋『植物はなぜ動かないのか』へちまプリーマー新書)より)

問一

1

5

から一つ選び、記号で答えなさい。その組み合わせとして適切なものを次の中から

- | | | | | |
|--------|------|------|------|------|
| ア、1一方 | 2一方 | 3しかし | 4一方 | 5しかし |
| イ、1一方 | 2しかし | 3一方 | 4しかし | 5一方 |
| ウ、1しかし | 2一方 | 3しかし | 4一方 | 5一方 |
| エ、1しかし | 2一方 | 3一方 | 4しかし | 5一方 |

問二 〰〰〰線部A・Bの本文における意味として適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

A「あろうことか」

ア、思ったとおりに

イ、よりによって

ウ、わずかだが

エ、おろかにも

B「不可欠」

ア、必要

イ、無意味

ウ、不利

エ、本質的

問三

a

c

に入る二字のことばを次の漢字を組み合わせでそれぞれ作りなさい。

知 観 能 利 察 機 点

問四

……線で囲まれた1～4の文を正しい順序に並べ替え、番号で答えなさい。

問五

——線部①「三角形が狭まっていく」とはどういうことか。その説明として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、底辺の生き物が、その上の生き物を支えているということ。
- 2、生存できる生き物の数が、少しずつ減っていくということ。
- 3、植物が減るにつれて草食動物の数も減っていくということ。
- 4、強い生き物の数はエサの量に左右されてしまうということ。

問六

——線部②「もしかすると、ピラミッドの底辺にいる植物が、一番、強いかも知れないのである」とあるが、筆者がこのように考えている理由として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、ピラミッドの底辺にいる植物にはエサの必要がなく、他の生き物には依存しなくてすむから。
- 2、トラやワシなどの強い生き物の生息数と植物の生息数を比べると、植物の数の方が多いから。
- 3、植物同士には食う食われるの食物連鎖の関係がないため、絶滅する恐れがまったくないから。
- 4、食物連鎖の上位にいる生き物は、エサとなる下位の生き物がいないと生存できなくなるから。

問七

——線部③「動物が味覚を獲得することは、植物にとっても都合の良いことであった」とあるが、動物に都合の良いこととはどのようなことか。また植物に都合の良いこととはどのようなことか。文中のことを用いてそれぞれ二十字以内で答えなさい。

問八 — 線部④「まったくの無防備なのである」とはどういうことか。その説明として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、肉食動物のイヌやネコは、植物の毒を無毒化する能力を体内に備えていないということ。
- 2、野生のイヌやネコは植物を食べる習慣がなく、毒の有無を完全には見分けられないこと。
- 3、イヌやネコの味覚は、植物の毒成分を感知できるように進化してこなかったということ。
- 4、人間とは違い、イヌやネコの舌では苦味や辛味をまったく認識することができないこと。

問九 — 線部⑤「無策だったわけではない」とはどういうことか。その説明として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、毒草だけ好んで食べることによって、エサに困ることなく生息数を維持してきたということ。
- 2、防御のために、植物に含まれる有毒物質でもおいしく感じるように発達してきたということ。
- 3、環境に適応するために、毒草を食べても体内で無毒化できるように進化してきたということ。
- 4、エサとなる植物を見て、解毒できるかどうか見分けられる能力を身につけてきたということ。

問十 — 線部⑥「迷惑な話である」とあるが、その理由として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、苦味や辛味をうまみと感じるように、人間が味覚を進化させてしまったから。
- 2、植物と動物が共存するための秩序を、人間が乱すようになってしまったから。
- 3、植物の持つ毒成分をすぐに認識できる能力が、人間に備わってしまったから。
- 4、植物が色や味を工夫するだけでは、人間に対抗できなくなってしまうから。

問十一

X

に入る文章として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、ピーマンやニガウリは未熟なうちは、苦み成分が多く含まれている。だから、子どもたちは未熟なピーマンやニガウリを食べるとおいしくないと感じる。
- 2、ピーマンやニガウリも赤や黄色に熟してくると、甘味が増してくる。そうになると、甘味を好む子どもたちはピーマンやニガウリを食べられるようになる。
- 3、ピーマンやニガウリは食べられないと思って、苦味物質を持っている。そして、子どもたちは苦いピーマンやニガウリを食べたくないと思っている。
- 4、ピーマンやニガウリの色が緑のうちには、食物としての栄養価はとても低い。そのため、子どもたちは緑色のピーマンやニガウリを好んで食べたりしない。

問十二

F

の段落につける小見出しとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、どうして有毒植物は少ないのか？
- 2、食べられないことが大切
- 3、なぜ草食動物は毒を持つのか？
- 4、アルカロイドは効果的

問十三

Y

にはどのようなことばが入るか。

F

の段落の中に使われていることばを用いて十字以内で答えなさい。

国語 解答用紙

受験番号
氏名

得点

問一	⑤	①
	⑥	②
問二	部首	
	部首名	
問三		③
		④
問四	材	
問五	所	
問二	1	
問一	X	2
	Y	3
問二	Z	
問三		

問十		
問八		
	問九	
問七		
問四		
問二		
	問五	
問一		
	問六	
問三		

問一		
	問二	A
問三	a	
	b	
問四	c	
		B
問五	↓	
	問六	
問七	動物	
	植物	
問八		
	問九	
問十二		
	問十	
問十三		